

アルタイ諸言語における複数形式の定性について
—日本語および朝鮮語との対照をつうじて—
**On the Definite-like Properties of Plurals in
“Altaic Languages”
—Contrasting with Japanese and Korean—**

風間 伸次郎

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

KAZAMA Shinijro

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 日本語
 2. 朝鮮語
 3. トルコ語
 4. モンゴル語
 5. ナーナイ語
 6. 複数形式の出現頻度に関する言語間の対照
 7. 複数形式の定性およびそれをめぐる諸特徴に関する言語間の対照・まとめ
- おわりに

キーワード：複数標示、定性、総称文、対照、アルタイ型言語

Keywords: plural marking, definiteness, generic reference, contrastive study, Altaic-type



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿では、日本語、朝鮮語、トルコ語（チュルク語族）、モンゴル語（モンゴル語族）、ナーナイ語（ツングース語族）の5つの言語を取り上げる。先行研究での記述の状況を踏まえた上で、コンサルタンの内省に基づく調査結果を加え、各言語の複数形式の定性について分析する。しかるのちに対照を行い、言語間の異同を確認する。得られた結果は下記のようなものである。

- 種の総称では、トルコ語とナーナイ語を除き複数形式が使用できない。
- トルコ語では、総称の目的語に対して複数形式のみを用いることはできず、対格も同時に使用しなければならない。
- モンゴル語では、不定の目的語に対しては対格が使用できないばかりでなく、複数形式も使用できない。一方、定の目的語に対しては複数形式が使用できるが、限定語と対格も必ず必要とする。
- 朝鮮語では、不定の目的語に対して複数形式が使用できない。
- 日本語では一般特性を述べる総称文でも複数形式が使用できない。モンゴル語でも一部の一般特性を述べる総称文では複数形式が使用できない。

Abstract

In this paper, I examine the definite-like properties of plurals in Japanese, Korean, Turkish (one of the Turkic languages), Mongolian (Khalkha Mongolian, one of the Mongolic languages), and Nanai (one of the Tungusic languages). Based on descriptions from previous research, I added some remarks from the data by elicitation from native speakers of each language and analyzed the definite-like properties of plurals in these languages. The main points of this paper are as follows:

- (1) The use of the plural form is correlated with definiteness in every language.
- (2) The plural form cannot be used in generic sentences of kind reference in Japanese, Korean and Mongolian.
- (3) The plural form cannot be used for generic objects only in Turkish; speakers must use accusative case with the plural form.
- (4) In addition to the accusative case, the plural form cannot be used for indefinite objects in Mongolian. On the other hand, the plural form can be used for definite objects, but in this case, both determiners and accusative must be used at the same time. Turkish and Mongolian are similar in that that plural and accusative forms work together; however they realize definiteness differently.
- (5) The plural form cannot be used for indefinite objects in Korean.
- (6) The plural form cannot be used in characteristic sentences in Japanese, nor can it be used in some parts of characteristic sentences in Mongolian.
- (7) The frequency of plural forms of these languages, from the data of the parallel corpus “Le Petit Prince,” is as follows: Turkish 723 > Korean 183 > Nanai 168 > Mongolian 117 > Japanese 89.

はじめに

Nomoto (2013) によれば、複数形式が定性の特徴を帯びる現象 (definite-like properties of plurals、以下「複数形式の定性」と呼ぶ) を持つ言語は数多く報告されているという。そのような言語はハイチ・クレオール、日本語、朝鮮語、クリヨル語 (ギニア・ビサウのポルトガル語クレオール)、中国語、パピアメント語、ベルシャ語、などであり、中でも中国語の“-men”と日本語の「-たち」について最も活発な議論が行われているという (Nomoto 2013: 3)。

本稿では、日本語、朝鮮語、トルコ語 (いわゆる「アルタイ諸言語」のうちのチュルク語族の言語)、モンゴル語 (同じくモンゴル語族の言語)、ナーナイ語 (同じくツングース語族の言語) の 5 つの言語を取り上げる。先行研究での記述の状況を踏まえた上で、(筆者を含む) コンサルタントの内省に基づく若干の聞き取り調査の結果を加え、各言語の複数形式の定性について分析する。しかるのちに本稿で対象とした言語間での対照を行い、言語間の異同を確認することによってこれらの言語における複数を示す形式の特性について考える。

1. 日本語

まず日本語については、もっとも生産性の高い接尾辞「-たち」のみを対象とする。「-ら」や「-ども」は本稿では考察の対象としない。

まず種指示 (kind reference) の名詞句による総称文¹⁾ (以下「種の総称文」と呼ぶ) では複数形式²⁾ 「-たち」を用いることはできない (筆者の内省³⁾ による)。

- (1) *恐竜たちは絶滅した。/cf. 恐竜は絶滅した。
- (2) *クジラたちは哺乳類だ。/cf. クジラは哺乳類だ。
- (3) *タコたちには足が8本ある。/cf. タコには足が8本ある。

Nakanishi and Tomioka (2004: 114) は日本語に関して次のような例を示している (日本語がローマ字表記であった点など、一部を改変した)。

- (4)a. イタリア人は陽気だ。
'Italians are cheerful.'
- (4)b. イタリア人たちは陽気だ。
'Some group of Italians are cheerful.'

すなわち「-たち」のない (4)a. は総称文のうちの一般特性文 (characteristic sentence: 対象の習慣的特性を記述する文、以下では「一般特性の総称文」と呼ぶ) として解釈されるが、「-たち」を用いた (4)b. はイタリア人のうちの定⁴⁾ の集団を意味する。このことは目的語においても存在文の主語においても同様である (Nakanishi and Tomioka 2004: 115, 116)。

- (5)a. その病院は看護婦を探している。
'That hospital is looking for a nurse / nurses (to hire).'
- (5)b. その病院は看護婦たちを探している。
'There is a nurse/are nurses that hospital is looking for.'
- (6)a. 井上さんには子供がいる。
'Mrs. Inoue has a child/children' (It asserts that Mrs. Inoue is a mother).
- (6)b. 井上さんには子供たちがいる。
'Mrs. Inoue has the children (to live for)' (For instance, Mrs. Inoue recently lost her husband, and the speaker says this sentence to mean.)

筆者の内省では、対格のない定の目的語に複数形式をつけることは可能である（この条件は後述する他の言語で問題となるのでここで取り上げる）。

- (7) あそこにいる学生たち呼んで来て。

一方、目的語に複数形式「-たち」を用いた場合、ここでも不定の解釈は難しいように感じられる。

- (8) ??何人か学生たち呼んで来て。／何人か学生呼んで来て。
（「学生たち」と言うときやはり何らかの定性が感じられる）

日本語の「-たち」に関しては、シルバースティーンの名詞句階層の左に位置する名詞（基本的に人間を指す（代）名詞）にその使用が偏ること、近似複数を示し得ることなどが指摘されている（庵他 2001: 530）。

2. 朝鮮語

朝鮮語に関しては *-deul*⁹⁾ のみを複数形式として考察の対象とする。朝鮮語にはこの他に近似複数を示すことのできる *-ne* があるが、もっぱら家族の名詞などにしか使えず（鄭 2005）、生産性が低いため本稿では考察の対象としない。下記での文法性判断に協力して下さったのは 1978 年生まれ慶尚北道醴泉郡出身の男性である。

Kwon and Zribi-Hertz (2004: 144) は朝鮮語に関して次のような例を示し、種の総称文には複数形式が使用できないことを指摘している（表記、グロス、英訳共に Kwon and Zribi-Hertz 2004 による、以下も）。

- (9)a. *pendeo-gom-eun poyudongmul i-da.*
panda bear TOP mammal COP DEC
'The panda is a mammal.'
- (9)b. **pendeo-gom-deul-eun poyudongmul i-da.*
panda bear PL TOP mammal COP DEC
Lit. 'The (various) members of the panda species are mammals.'

一方、一般特性の総称文では複数の形式の使用も許容されるという (Kwon and Zribi-Hertz 2004: 145)。ただし英語訳からわかるように定の解釈も可能である。

- (10) *pendeo-gom-deul-eun julo daenamu-leul meog-neun-da.*
 panda bear PL TOP mainly bamboo ACC eat PRS DEC
 (i) 'The pandas mainly eat bamboo.'
 (ii) 'The members of the panda species mainly eat bamboo.'

次に目的語の場合について考察する。コンサルタントによれば、恒常的な状態を示す文である下記の (11)a. ~ (11)d. は全て発話可能で、どの文も一般論の文として解釈されるという (したがって目的語の *uisa* 「医者」はどれも不定であって、定の医者とは解釈されない)。対格の使用不使用はこの場合特に文意に影響を与えない。

- | | | | |
|--------|------------------|--------------------------------|---------------------------------------|
| (11)a. | na=neun
I=TOP | uisa
doctor | silh-eo#ha-nda.
dislike-CVB#do-PRS |
| (11)b. | na=neun
I=TOP | uisa=leul
doctor=ACC | silh-eo#ha-nda.
dislike-CVB#do-PRS |
| (11)c. | na=neun
I=TOP | uisa=deul
doctor=PL | silh-eo#ha-nda.
dislike-CVB#do-PRS |
| (11)d. | na=neun
I=TOP | uisa=deul=eul
doctor=PL=ACC | silh-eo#ha-nda.
dislike-CVB#do-PRS |

一方、すでに成立した過去のできごとを語る文では、当然目的語は特定のものでなければならぬ。この時、目的語に複数形式を用いることはできず、(12)c., (12)d. は非文となるという (なお (12)c., (12)d. はもし主語が複数であれば、その複数性を標示する文としては成立する⁶⁾)。

- | | | | |
|--------|-------------------|-------------------------------|---------------------|
| (12)a. | na=neun
I=TOP | chaeg
book | sa-ssda.
buy-PST |
| (12)b. | na=neun
I=TOP | chaeg=eul
book =ACC | sa-ssda.
buy-PST |
| (12)c. | *na=neun
I=TOP | chaeg=deul
book=PL | sa-ssda.
buy-PST |
| (12)d. | *na=neun
I=TOP | chaeg=deul=eul
book=PL=ACC | sa-ssda.
buy-PST |

目的語が定であることを明確にすれば、複数接辞は問題なく用いることができるという。なおここでの対格の使用は特に義務的ではないという。

- | | | | | |
|------|------------------|--------------------|-----------------------------------|---------------------|
| (13) | na=neun
I=top | ileon
like.this | chaeg=deul(=eul)
book=pl(=acc) | sa-ssda.
buy-pst |
|------|------------------|--------------------|-----------------------------------|---------------------|

朝鮮語の複数形式 *-deul* については物にもつくこと、同質複数しか示せないこと、などが知られている (鄭 2005: 2, 5)。

3. トルコ語

トルコ語の複数形式は *-lar/-ler* である。下記での文法性判断に協力して下さったのは 1978 年生まれで İzmir 育ちの男性である。

Göksel and Kerslake (2005) では次のような例によって、種指示の名詞句による総称文に *bir* 「1」も複数接辞も伴わない裸の名詞が用いられることを示している (Göksel and Kerslake 2005: 380)。

- (14) **Balina** memeli bir hayvan-dır.
whale mammal an animal-GM
'The whale is a mammal.'

一般特性文でも裸の名詞が用いられる例をあげている (Göksel and Kerslake 2005: 380、文字飾りやゲロス (ないものも含め)、英訳共に原典による、以下でも同じ)。

- (15) **Kuş** uçar.
'Birds fly / A bird flies.'

ただし、コンサルタントによればこれらの文の主語に複数形式をつけても同じ意味で言うことができるという。

- (16) **Balınalar** memeli hayvandır.
(17) **Kuşlar** uçar.

Göksel and Kerslake (2005) は、次に 'The indefinite generic' (以下「不定総称文」と呼ぶ) として、*bir* 「1」を伴った名詞句による総称文を示している (Göksel and Kerslake 2005: 381-382)。 *bir* 「1」の前には形容詞をはじめとする修飾要素や *herhangi* 'any' や *böyle / şöyle / öyle* 'such' などの語がくる。このタイプの表現はある種類のうちの典型的なメンバーを表現するとしている。

- (18) {**Akıllı bir insan**} borçlanmaktan kaçınır.
{Wise people} avoid getting into debt.
(19) **Herhangi bir anne** bu sorunu tanır.
{Any mother} would recognize this problem.

さらに複数形式のついた名詞による総称文を示している。このタイプの表現は意味的に裸の名詞によるタイプより不定総称文に近く、不定総称文として Göksel and Kerslake (2005: 381-382) が示した例文は、*herhangi* 'any' による例文以外は全て複数形の名詞による総称文に置き換えることができるという。

複数形式のついた名詞による総称文は人間の種類に関しての一般化を行う際に好んで用いられるという (Göksel and Kerslake 2005: 382)。なおこの文の英訳で (*The Italians* と なっていることから、主語が定の解釈も可能であることがわかる。

- (20) **İtalyanlar** konuşkandır.
'*(The) Italians* are talkative.'

複数形式のついた名詞による総称文は、話し手の個人的な観察や経験に基づく控えめな、もしくは素朴な一般化の表現に使われやすいとしている (Göksel and Kerslake 2005: 382)。

- (21) Bugün **gençler** yemek yapmasın-ı bilmiyorlar.
'*Young people* today don't know [how to cook].'

(21) において、Bugün gençler「今日の若者」には「年輩の者」との対比があると考えられる。また話し手はその中に含まれる具体的な人物たちを想起しているのではないかと考える。

裸の名詞による総称は目的語でも用いられる (Göksel and Kerslake 2005: 383)。

- (22) Ayten **şapka** seviyor.
'Ayten loves *hats*.'

何も限定語を伴わない名詞に対格が表示されている場合、その名詞はふつう定である (Göksel and Kerslake 2005: 383)。

- (23) Ayten **şapkayı** seviyor.
'Ayten loves *the hat*.'

ただし次のような文では総称としての解釈が可能である (Göksel and Kerslake 2005: 383)。

- (24) Ayten **şapkayı** başkalarında seviyor, ama [saçları güzel olduğu için] kendisi pek giymiyor.
'Ayten likes hats on other people, but [because she has beautiful hair] she herself doesn't wear [them] much.'

したがってここでも何らかの対比のある文脈においては、本来「定」でなければならない形式の解釈が異なってくることがあるということがわかる。

不定で複数総称の目的語は、対格を義務的にとらなければならない (Indefinite and plural generics occurring as direct objects are obligatorily accusative-marked, (Göksel and Kerslake 2005: 384))。

- (25) Ali **doktorları** sevmez.
'Ali doesn't like *doctors*.'

ただし、不定であっても総称でなければ、対格のつかない複数形の目的語も使用できる (Göksel and Kerslake 2005: 174)。

- (26) Bu konuda kitap(lar) okumuş.
'It seems he has read books on this subject.'

コンサルタントにはさらに次のような確認を行った。まず *Onun çocuğu var*. 「彼には子供がいる」という文に対し、「子供」を複数にして言えるかどうかを確認したが、これは問題なく言えるとのことであった。

- (27) O-nun çocuk-lar-ı var.
(s)he-GEN child-PL-3 exist

そこでこの文と単数形の文との間に定性に関する違いがあるかを訊いたが、数以外に違いはなく、単に「彼には子供（複数）がいる」という意味に解釈されるとのことであった。つまり日本語のように「彼にはあの子供たちがいる」というような定の解釈にはならない。

なお、トルコ語の複数形式は近似複数を示すことができる。すなわち *Ali'ler* は「何人かのアリという名の人々」という意味にも「アリとその仲間（家族）たち」という意味にもなる。*teyze-ler-im* [aunt-PL-1SG] は「私の母方のおば（複数の）」だが、*teyze-m-ler* [aunt-1SG-PL] は「私の母方のおばとその家族」の意になる (風間 2003: 252)。

4. モンゴル語

モンゴル語の複数形式には不規則な形のものを含め、多くの形式がある。ここでは下記の *-nar* と *-((n)oo)d₂, -s* を対象⁶⁾ とする。*-nar* と *-((n)oo)d₂, -s* は下記の先行研究にあるように用いられる名詞についてシルバースティーンの名詞句階層上の位置の違いがあり、近似複数となるか同質複数となるかについても違いを見せる。

山越 (2003: 147) では Kullmann and Tserenpil (1996) をはじめとする記述研究を踏まえた上で、モンゴル語の複数形式について下記のような結論⁷⁾ を示している。

-nar :

シルバースティーンの名詞句階層のうち、人物名詞以上に位置する名詞に対して用いられる。より上位の名詞、具体的には人称代名詞、固有名詞、親族名詞ではおもに近似複数を意味し、下位になると同質複数の意味で用いられる傾向がある。その他の複数形式に比べ自立性が強く、先行する名詞との結合度は強くない。

-((n)oo)d₂, -s :

シルバースティーンの名詞句階層のうち、固有名詞、親族名詞以外の人物名詞より下位の名詞に対して用いられる。総じて同質複数を意味し、通常の派生接尾辞同様に、先行する名詞と結合して機能している。

モンゴル語の複数形式がシルバースティーンの名詞句階層において、なぜこのような分布を示すのかについて山越 (2003: 139) は「これは名詞句階層が個性の強さや定性によって並べられているという仮説に合致する。文脈による違いも、定性に関与するものと予測される」と説明している。「定性の関与」について指摘しているが、それ以上は特に指摘していない。なお *xün* 「人」の複数形式には補充法的な *xümüüs* が用いられる (山越 2003: 134)。下記ではこの形式も扱う。

Janhunen (2012: 99) では、次のように述べている。

ふつう、複数の諸形式は特定で個別の、もしくは特定か個別の行為者の複数性をしめす。一方、非特定で個別化されていない行為者の集合的な多数はふつう無標の基本形もしくは単数形によって示される。(In general, the plural forms indicate a plurality of specific and/or individualized actors, while a collective multitude of non-specific and non-individualized actors is normally indicated by the unmarked basic or singular form.)

ただ具体的な例文や分析はなく、特定や個別化に関するそれ以上の記述もない。

Mishig (1957: 73) には「複数接尾辞のついた名詞が目的語である時に、(ほとんどの場合) 対格の接尾辞がつくことが多い」という記述があるが、定性に関する言及はない。そこでは3つの例文を示しているが、そこでの複数接辞と対格のついた名詞はいずれも眼前の定の対象物である。

モンゴル語に関しては以下のような聞き出しによる調査の結果を得た。下記での文法性判断に協力して下さったのは1989年生まれ *Övürxangaj* 出身の女性である。なおモンゴル語はキリル文字をローマ字に翻字⁹⁾して示す。

一般特性の総称文において、人間を示す名詞に複数形式を用いても非文にならず、意味も変わらずに一般特性の総称文として解釈できる。

- (28) *Itali xümüüs zugaataj.*
 Italian man.PL cheerful
 「イタリア人たちは陽気だ」

総称文ではなく、習慣的な状況で主語が不定の場合、複数が使われにくいという。

- (29) *Ene güür-eer { xün mal / *xümüüs mal-uud } naaş caaş*
 this bridge-ins { man domestic.animal / man.pl domestic.animal-pl } this.way that.way
- ürgelž jav-ž baj-dag.*
 continually go-cvb be-hab.ptcp
 「この橋(の上)を人や家畜があちらへこちらへと絶えず行き来している」

しかし上の文で、主語を *xümüüs* (man.PL) だけにすれば言えるという。他方、*mal-uud* (domestic.animal-PL) のみにしては言えない¹⁰⁾ という。

次の文では *xüüxd-üüd*「子供たち」と複数にすることもできるが、*xüüxd-üüd*「子供たち」が定に解釈されることはないという。ただ子供が何人いるかを知っているならば、*Ter xün xojor xüüxedtej*。「あの人は二人子供がいる」のようにその数を明示して言うのがふつうであるという。

- (30) *Ter xün { xüüxed-tej / ?xüüxd-üüd-tej }.*
that man { child-PROP / child-PL-PROP }
 「あの人は子供がいる」

次のような $-(n)oo)_d_2$ を用いた種の総称文で主語を複数形にすることはできないという。

- (31) *{ najmaalž / *najmaalž-ood }* *najman xöl-tej.*
{ octopus / octopus-PL } *eight foot-PROP*
 「タコは足が8本ある」

同じく $-(n)oo)_d_2$ を用いた一般特性の総称文でも主語を複数形にすることはできないという。

- (32) *{ Mašin / *Mašin-uud }* *Mongol-d ix üne-tej.*
{ car / car-PL } *Mongolia-DAT very price-PROP*
 「車はモンゴルではとても高い」

ただし、その内部のメンバーが列挙され、他との対比のニュアンスがある文では、総称であっても複数形式を用いることができるという。内部のメンバーが問題になればそれは部分集合であり、もはや不定とは言えないのかもしれない。

- (33) *Benz, Mitsubiši ge-sen mašin-uud*
Mercedes.benz Mitsubishi say-PERF.PTCP car-PL
- Mongol-d ix üne-tej.*
Mongolia-dat very price-prop
 「ベンツ、三菱といった車はモンゴルではとても高い」

次に目的語について分析する。

Janhunen (2012: 206-207) では目的語の表示の条件の一つとして、総称性 (genericness) をあげている。Janhunen (2012: 206-207) は次のように述べる。すなわち、モンゴル語において目的語が定もしくは特定の場合、目的語は対格をとる。定や特定を表示する要素 (名詞に先行する指示詞や *neg* 「1」) がいない場合、その名詞はふつう総称として解釈される。総称の目的語はふつう無標である。その場合に数は特定されなくなる。なお以下の例文のグロス は筆者による、一方、例文の表記方法と英訳は Janhunen (2012) による。

- (34) *neg mory ab-sen*
 one horse buy-p.prf
 'I bought a horse.' (Janhunen 2012: 207)

- (35) *mory ab-sen*
 horse buy-P.PRF
 'I bought a horse / some horses.' (Janhunen 2012: 207)

以下は再びコンサルタントによる判断である。まず対象が不定の場合、目的語が対格なしで現れることを確認した。

- (36) Bi nom av-san.
 I book buy-PERF.PTCP
 「私は本を買った」

他方、対象が定のものであれば対格が出現するが、対象が複数であればその名詞を複数形にして次のように言うことができるという。

- (37) Bi ene nom-nuud-yg av-san.
 I this book-pl-acc buy-perf.ptcp
 「私はこの本（複数）を買った」

この場合、基本的に *ene*「この」や *ter*「その、あの」、*nögöö*「例の」などの何らかの限定語が必要であるという。このように限定語がないときわめて不自然であるが、定の複数の本とは解釈されないだろうという。

対象が不定の場合に、「本」に対格を用いることなく、単に複数形式 $-(n)oo)_d_2$ のみを用いて次のように言うことはできないという。

- (38) *Bi nom-nuud av-san.
 I book-PL buy-PERF.PTCP
 (意図した意味) 「私は本（複数）を買った」

名詞をいろいろ別なものに替えて訊いてみたが、やはり不定の対象に複数形式をつけることはできない¹¹⁾と判断された。不特定の複数の対象については *xed(en)*「いくつ(か)の」、*olon*「たくさん」などを用いて次のように言うのが自然であるという。なおこの場合にも目的語に対格や複数の接尾辞をつけることはできないという(この点についてはすでに先行研究の指摘がある、例えば Janhunen 2012: 99)。

- (39) Bi {(xed) xeden / olon } nom av-san.
 I {(some) some / many } book buy-PERF.PTCP
 「私は {何冊かの／たくさんの} 本を買った」

対象が人間であっても同様に、不定の対象に複数形式のみをつけた文は許容されず、対象が定で対格をとる場合にのみ複数形式が許容される。

- (40) *Bi bagš nar xar-san.
 I teacher PL see-PERF.PTCP
 (意図した意味) 「私は (複数の) 先生を見た」

- (41) Bi ter bagš nar-yg xar-san.
 I that teacher pl-ACC see-PERF.PTCP

対象が不定の場合にはやはり xed(en) 「いくつ (か) の」を用いて表現するという。単数であれば neg 「1」を用いるという。

- (42) Bi {neg suragč / xeden suragči-d} duud-san.
 I {one student / some student} call-PERF.PTCP
 「私は {一人の学生を／何人かの学生を} 呼んだ」

モンゴル語では、日本語同様、文脈からわかる場合に主語は現れなくともよいが、bagš nar xarsan. という発話を単独で聞いた場合には、「先生たちを見た」という意味に解釈することはできず、「先生たちが (何かを) 見た」という意味に解釈されるという。

習慣的な行為の目的語も不定とみなされ、複数形にはならないという。

- (43) Bat ödör bür { talx / *talx-nuud } id-deg.
 Bat day every bread / bread-PL eat-HAB.PTCP
 「バトは毎日パンを食べている」

次の文のように yanz бүр 「いろいろな」があっても talx 「パン」を複数にしない方がよいという。

- (44) ?Bat ödör bür yanz bür-ijn talx-nuud bari-dag.
 Bat day every kind all-GEN bread-PL bake-HAB.PTCP
 「バトは毎日いろんな種類のパンを (焼いて) 作っている」

日本語で観察されたような違い、すなわち名詞が複数であるか否かによって定性に違いが生じる例も確認された。

- (45)a. Ter emneleg suvilagč xaj-ž baj-na.
that hospital nurse look.for-CVB be-IND
「その病院は看護婦を募集している」
- (45)b. *Ter emneleg suvilagč-id xaj-ž baj-na.
that hospital nurse-PL look.for-CVB be-IND
- (45)c. Ter emneleg suvilagč-id-yg xaj-ž baj-na.
that hospital nurse-PL-ACC look.for-CVB be-IND
「その病院は(どこかへ行ってしまったその病院の)看護婦たちを(その行方を)探している」

すなわち、(45)a. は不定の解釈、(45)c. は定の解釈を受ける。ただしこの場合、対格も定でなければ使われないので、複数形式のみの機能とみなすことはできない。対格を用いず、複数形式のみを用いた (45)b. は非文と判断される。

話者の内省では、複数形は発話の現場にあるものなどに関して用いるのがもっとも自然であるという。

風間 (2020: 42-43) で指摘したように、個別の事態であれば現れる再帰接尾辞が一般論を述べる場合には現れないことがある。したがってモンゴル語では複数形式、対格形式、再帰形式のいずれも定不定に関わっていることがわかる。

5. ナーナイ語

ナーナイ語で生産的な複数接辞は *-sal / -səl* である (Avrorin 1959: 133)。同質複数として用いられる (Avrorin 1959: 136)。他にはかなり生産性の低い接辞が何種類もあり、その中には近似複数を示すことのできる形式もあるが、本稿では扱わない。下記の例にもあるように、人間名詞のみならず動物や物を示す名詞もこの接辞をとる。もっとも詳しい先行研究である Avrorin (1959) が *-sal / -səl* について記述している部分 (Avrorin 1959: 133-141) に、特にこの接辞の定性についての記述は見当たらない。

まず種の総称文では、複数接辞を用いなくともよい。ただし、コンサルタント (1938 年 Najkhin 村生まれの女性) に確認したところ、主語に複数形式を用いてもかまわないという。

- (46) atkajan(-sal) jakpon-ji bəgji-ku.
spider(-PL) eight-INS foot-PROP
「クモは8本の足がある」 (風間 2013: 266、ただし複数接辞の使用は今回の確認)
- (47) kajman(-sal) mlekopitajusee zivotnaj-sal.
whale-PL mammal animal-PL
「クジラは哺乳類だ」

一方、一般的特性を述べる総称文で複数接辞の用いられた例は多く見出される。

- (48) geolog-sal aali-asi gurun.
 geologist-PL get-tired-NEG.PRS.PTCP people
 「地質学者は疲れを知らない人たちだ」 (Onenko 1980:34)
- (49) gasa-sal tuə ñamajia boa-do tuəsu-i-či.
 waterfowl-PL winter warm place-DAT winter-IMPF.PTCP-3PL
 「水鳥たちは冬暖かい地方で冬を過ごす」 (Onenko 1980:34)
- (50) akani-sal tui təčičə-i-ni.
 upstream.resident-PL like.that wear-IMPF.PTCP-3SG
 「上流のナーナイ人たちはそんな風に着るのさ」 (風間 2000: 11)
- (51) xoto-sal=daa xəm aambo-i ixo-sal=daa xəm aambo-i.
 city-PL=CUM all be.flooded-IMPF.PTCP village-PL=CUM all be.flooded-IMPF.PTCP
 「街なども全て水に浸かる、村々も全て水に浸かる」 (風間 2000: 103)

gələ-「求める、探す」の目的語に複数形式がついても、定にはならず、「募集する」の意味で実現する。なお複数形式がついているのに、対格が現れていない点も重要である（もちろん対格の後続した例も多く見出される）。したがってこれは定不定による対格の使用の可不可の問題となる。

- (52) əsi=tənii əlčiu-səl axoo-sal gələ-i=goani,
 now=TOP slave-PL cook-PL look.for-IMPF.PTCP=ASSER

 ənə-gu-ji jia-go-ji.
 go-CVB-REF.SG company-DESIG-REF.SG
 「今奴隷たち、飯炊き係を求めるのだ、行くための仲間として」 (風間 2006: 70)

数詞が修飾している場合でも複数接辞は付加され得る。このような場合複数形式は任意である。このことは Avrorin (1959: 140) にすでに指摘がある。

- (53) mii juə naonjokaan-sal baa-xam-bi.
 I two boy-PL find-PERF.PTCP-1SG
 「僕は二人の少年たちに会った」 (風間 2008: 43)

6. 複数形式の出現頻度に関する言語間の対照

ここでは 4 言語の複数形式の頻度を対照する。データには *Le petit prince* (和訳書名『星の王子さま』) の各言語版 (入力し電子資料としたもの) を用いた。トルコ語では -lar/-ler を、朝鮮語では -deul を、日本語では「-たち」を検索した。モンゴル語に関しては、研究者であるジンガン氏が形態素分析を行った電子資料があるので、複数のグロス自体を集計した。ナーナイ語は前出のコンサルタントの方にロシア語から翻訳していただいたものを筆者が入力した電子資料があるので、これによって -sal/-säl を検索した。その数値と共に、頻度の多かった順に言語を並べると、以下のような結果が得られた。

トルコ語 723 > 朝鮮語 183 > ナーナイ語 168 > モンゴル語 117 > 日本語 89

モンゴル語と日本語で生産性のもっとも高い複数形式は、すでに見たように名詞句階層の左に位置する名詞に偏って現れる。実際に日本語の例は全て人間名詞につく例のみであった。したがって物を指す名詞などにもつく他の 3 言語に比べて複数形式の出現頻度が低いのは当然の結果であるといえる。トルコ語では形動詞をはじめとする文末の動詞についた例も多く観察された。名詞的に機能する形容詞についた例もある程度観察された。これらの要因からトルコ語における複数形式の頻度が高くなっているものと考えられる。

ただ今回のこの調査は翻訳された資料によるもので、各翻訳が参照した元の言語で複数形になっていた語が影響を及ぼした可能性が考えられる。もしこうした影響のない各言語での口語によって調査を行えば、複数形式の出現頻度は全般にもっと低くなり、左側の 3 言語と右側の 2 言語の差はさらに大きくなるのではないかと予想する。

7. 複数形式の定性およびそれをめぐる諸特徴に関する言語間の対照と考察

本稿では先行研究からの情報と本稿での調査を基に、複数形式の定性に関して本稿の対象言語間に次のような異同のあることが明らかになった。

- どの言語も複数形式の使用不使用は定性と関連がある。
- 種の総称では、トルコ語とナーナイ語を除き複数形式が使用できない (例文(1)~(3), (9)b., (16), (17), (31), (46), (47))。
- トルコ語では、不定の目的語に対して複数形式のみを用いることはできない。必ず対格も同時に使用しなければならない (例文(25))。不定の目的語に対して、格なしで複数形式のみを使用することはできる (例文(26))。
- モンゴル語では、不定の目的語に対しては対格が使用できないばかりでなく、複数形式も使用できない (例文(38), (45)b., (45)c.)。一方、定の目的語に対しては複数形式が使用できるが、限定語と対格も必ず必要とする。トルコ語とモンゴル語は、複数形式と対格の出現が連動している点で若干類似しているが、その定不定の実現のしかたは異なる。
- 朝鮮語では、定の目的語に対して複数形式が使用できない (例文(12)c., (12)d.)。

- 日本語では一般特性を述べる総称文でも複数形式が使用できない(例文(4)b.)。モンゴル語でも一部の一般特性を述べる総称文では複数形式が使用できない(例文(32)、反例は(28))。

定性に関して明らかになった上記の諸特徴を、各言語の複数形式が持つその他の特徴と合わせて表に整理すると次のようになる。

表1: 本稿で対象とした諸言語における複数形式が示す諸特徴の対照まとめ

	日本	モンゴル	ナーナイ	朝鮮	トルコ
種の総称文で複数形式が使用できない	○	○	×	○	×
一般特性の総称文で複数形式が使用できない	○	△	×	×	×
不定の目的語には複数形式が使用できない	○	○	×	○	×
近似複数を示すことができる	○	○	×	×	○
名詞句階層における制限がある	○	○	×	×	×
使用頻度	<	<	<	<	<

日本語とモンゴル語、次いで朝鮮語には、複数形式の使用に定性に関するいくつかの制限のあることがわかる。名詞句階層上における制限とともに、特に日本語とモンゴル語について、こうした定性に関する制限は両言語における複数形式の使用頻度の低さの原因になっていると考えられる。

種の総称文で複数形式が使えないことは日本語母語話者にとって多くの言語であてはまるように感じられるが、必ずしもそうとは言えない。『語学研究所論集』18号は「所有・存在表現」に関する多くの言語のデータを収録しているが、このうちの調査例文の一つに種の総称文である「タコには足が8本ある」がある。そのうちフィンランド語のデータでは複数形が用いられている。

- (54) Mustekalo-i-lla on kahdeksan lonkero-a.
octopus-PL-ADE be.3SG.PRS eight foot-PART (坂田・高橋 2013: 205)

英語でも複数形式が使用できるという(ロサンゼルスで言語形成期を過ごした1998年生まれの話者による)。

- (55) An octopus has eight legs. / Octopi(Octopuses) have eight legs.

以下ではさらに本稿で得られたいくつかの観察結果についてまとめておく。

モンゴル語では習慣的な行為の主語及び目的語においても複数形式が使われにくいことをみた(例文(29), (43), (44))。一般的な特性の総称文でも、その内部のメンバーを話し手が意識し、他との対比の文脈で使用される時には複数形式の使用が好まれること、もしくは許されることがある(例文(21), (33))。

おわりに

ここでは今後の課題を 2 つ示しておく。

本稿ではアルタイ諸言語の 3 つのグループからそれぞれ 1 つの言語をとりあげて、それらの言語において複数接辞が示す定性の状況を整理することができた。ただどの語族にもさらに多くの言語が所属しており、本稿で得た結果が語族全体に通ずるものであるかどうかはわからない。琉球諸語をはじめとする多くの言語／方言が所属している日本語族においても同じことが言える。サハ語（シベリアのチュルク語族の言語）の文法である江畑 (2006: 33) には「対格目的語は、定の目的語や、総称目的語として用いられます。目的語が固有名詞、代名詞、数詞や抽象名詞であるとき、または複数接辞や所有接辞の付いた名詞句であるときは、必ず対格目的語が用いられます」ならびに「主格目的語は、不定の目的語として用いられます。主格目的語は動詞の直前に置かれ、また複数接辞や所有接辞がつくことはありません」とある。この状況はトルコ語よりもモンゴル語に似ている。言語間の影響を含め、トルコ語以外のチュルク語族の言語、モンゴル語以外のモンゴル語族の言語、ナーナイ語以外のツングース語族の言語に関して、今後のていねいな調査が必要である。

2 つ目は本稿の対象言語が示す複数形式の示す定性という現象を言語類型論的な観点からどう位置付けるか、という問題である。Nomoto (2013) や Chierchia (1998) は類型論的な観点から複数形式の示す定性の問題を扱っているが、筆者はなおこれらの先行研究を十分に理解した上で議論する段階に至っていない。一方、本稿で対象とした言語は「アルタイ型」（亀井・河野・千野（編）1996: 28-29, 499）の類型的な特徴を共有しているにも関わらず、複数形式の示す定性に関しては大きな違いを見せている。したがって複数形式の示す定性と有機的な関連を持つ何らかの類型論的特徴が存在するのか、存在するとすればそれはどのような特徴か、という点の解明が今後の課題である。

略号一覧（先行研究が使用しているものを含む）

1: 1st person / 3: 3rd person / ACC: accusative / ADE: adessive / ALIEN: alienability / ASSER: assertive / COP: copula / CUM: cumulative / CVB: converb / DAT: dative / DEC: declarative / DESIG: designative / GEN: genitive / GM: generalizing modality / HAB: habitual / IMPF: imperfective / IND: indicative / INS: instrumental / NEG: negative / PART: partitive / PERF: perfective / P.PRF: participle, perfective / PL: plural / PROP: propriative / PRS: present / PST: past / PTCP: participle / REF: reflexive / SG: singular / TOP: topic

註

- 1) 「種指示の名詞句による総称文」および「一般特性の総称文」という用語は吉田 (2004: 2) に倣った。「一般論」という用語の方がよく用いられているが、上記の両者を区別するためより明確な用語としてこれらの用語を使用することにした。ただし目的語の定不定を問題にする場合には、「一般論」という用語も用いることとする。
- 2) 本稿で対象とした言語の複数形式は朝鮮語の形式を除きすべて接尾辞であるとみなしていると考えられるが、朝鮮語の複数形式は名詞のみならず動詞などにもつくので付属語であると考えられる。ただ今回の論旨とは関わらないと考えたため、接辞であるか付属語であるかという点について本稿では深く問題とせず、どの言語の複数標示の形式も単に「複数形式」と呼ぶことで統一することとした。
- 3) 筆者は1965年生まれ東京出身の男性である。なお「全種類の恐竜たちが絶滅したのだが、マンモスをはじめとする大型哺乳類たちの中には少しあとの時代まで生き残ったものもある。」などとすれば、やや許容度は上がるように思われる(同じく筆者の内省による)。すなわち、内包する種類を問題にして名詞が複数形式となり、しかも他との対比がある状況では許容度が上がるものと考えられる。この点については4章のモンゴル語についても類似した例がみられたので、そこで再び触れている。
- 4) 本稿において「特定」とは話し手が同定できるもの、「定」とは話し手も聞き手も同定できるもの、と定義する。したがって「定」であれば、必然的に「特定」でもある。
- 5) ハングルの翻字は大韓民国文化観光部告示 第2000-8号「国語のローマ字表記法」による。
- 6) 脱稿後、さらにコンサルタントの方からコメントをいただいたが、目的語が有情物である場合にも若干判断は変わって来るといふ。すなわち、「何人か学生たち呼んで来て。」(不定の目的語に複数接辞のみがつく構造)のような構造の文は朝鮮語では発話可能であるという。なおこの場合に対格はあってもなくてもよいという。
- 7) -(n)ood2 における下付きの数字は母音調和による異形態のあることを示している。-ood2 であれば、-ood / -uud の交替を示す(山越 2003: 132)。
- 8) さらに -nar-ood をはじめとする接尾辞重複型の形式についても結論を示しているが、ここでは省略する。
- 9) 翻字は次の方式に拠る: a = a, ɓ = b, v = v, ɣ = g, d = d, e = je, ɛ = jo, ʒ = ž, z = z, ɪ = i, ʏ = j, k = k, l = l, m = m, n = n, o = o, p = p, r = r, c = s, t = t, y = u, φ = f, x = x, ɥ = c, ɟ = č, ɬ = š, ɰ = šč, ʔ = ʔ, ɣ = y, ʕ = ʕ, ɛ = e, ju = ju, ja = ja, ø = ø, ʏ = ü
- 10) mal「家畜」という語には集合名詞的な性格があり、そもそも複数接辞がとりにくい語であるのかもしれない。なおこのコメントは山越康裕氏よりいただいた。
- 11) 唯一、öngijn xarandaa「色鉛筆」という語では不特定で複数形式をとった形が許容された。これは色鉛筆がさまざまな色の鉛筆のセットであることが原因ではないかと考えられるが、なお明らかでない。さらにいろいろな名詞について調べる必要があると考えられる。

[謝辞]

第1稿を提出した後、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所の共同利用・共同研究課題「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)の2020年度第2回研究会において本稿のテーマについて発表させていただいた。研究会では梅谷博之氏より Mishig (1957) の文献に関連する記述のあることを御教示いただき、江畑冬生氏より Göksel and Kerslake (2005: 174) に本稿の(26)の例文のあることを御教示いただいた。他にも研究会のメンバーからいくつか貴重なコメントを賜った。ここに記して感謝申し上げたい。ただし本稿における一切の誤謬は筆者に帰するものである。

参考文献

- Avrorin, V. A. 1959
Grammatika nanajnskogo jazyka, t. I. AN SSSR: Moskva/Leningrad.
- Chierchia, Gennaro 1998
Reference to Kinds across Languages. *Natural Language Semantics* 6: 339-405.
- Göksel, Aslı and Celia Kerslake 2005
Turkish. A comprehensive grammar. Routledge, London.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 2001
『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』白川博之（監修）東京：スリーエーネットワーク
- Janhunen, Juha 2012
Mongolian. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）1996
『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 風間伸次郎 2000
『ナーナイの民話と伝説 5』東京：東京外国語大学
- 風間伸次郎 2003
「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク・モンゴル・ツングース）及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか — 対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹（共編）『日本語系統論の現在』日文研叢書31: 249-340. 京都：国際日本文化研究センター
- 風間伸次郎 2006
『ナーナイの民話と伝説 9』千葉：千葉大学文学部
- 風間伸次郎 2008
『ナーナイの民話と伝説 11』札幌：北海道大学文学研究科
- 風間伸次郎 2013
「ナーナイ語の所有表現」『語学研究所論集』18: 259-276.
- 風間伸次郎 2020
「モンゴル語の再帰接辞の機能について」『語学研究所論集』24: 37-62
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil 1996 [2006 (第4版)]
Mongolian Grammar. Hong Kong, Jenso. Ltd. (第4版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd.)
- Kwon, Song Nim, and Anne Zribi-Hertz 2004
Number from a syntactic perspective: Why plural marking looks ‘truer’ in French than in Korean. In Bonami, Olivier, and Patricia Cabredo Hofherr, eds., *Empirical issues in formal syntax and semantics* 5, 133-157.
- Mishig, L. (1957) *Mongol xelnij tusagdaxuun ba bajc.* Ulaanbaatar: BNMA ulsyn šinžaex uxaany xüreeleen.
[『モンゴル語の目的語と付加語』ウラーンバートル：モンゴル人民共和国国立科学研究所]
- Nakanishi, Kimiko and Satoshi Tomioka 2004
Japanese plurals are exceptional. *Journal of East Asian Linguistics* 13:113-140.
- Nomoto, Hiroki 2013
Definite-like plurals. ms.

Onenko, S. N. 1980

Nanajsko-russkij slovar'. Moskva: izd. russkij jazyk.

坂田晴奈・高橋健太郎 2013

「フィンランド語 データ:所有表現」『語学研究所論集』18: 201-212.

山越康裕 2003

「モンゴル語の複数接尾辞と名詞句階層」『言語研究』124: 131-153.

吉田光演 2004

「総称文における日本語名詞句の種指示について」『言語文化研究』（広島大学総合科学部）30: 25-55..

鄭惠先 2005

「日本語と韓国語の複数形接尾辞の使用範囲: 文学作品と意識調査の分析結果から」『日本語科学』17: 27-46.

調査資料

Cegmidijn šüxbaatar (tr.) 2001

Bjaxan Xuntajž. Comorlig Xevlel XXX: Ulaanbaatar.

Erdoğan, Fatih (tr.) 1987

Küçük Prens. Mavibulut Yayıncılık: İstanbul.

Kim, Kyeong-Mi (tr.) 2002

Eorin wangja. Chaekmanteuneunjip: Seoul.

内藤濯（訳） 1962

『星の王子さま』岩波書店: 東京.